山岳の保護と登山

――日高山脈の公園化について――

橋本誠二

山岳の自然保護については、たとえば景観、学術、あるいはレクリエーションなどいろいろな立場で考えられていて、ここにくり返す必要もないだろう。だが、それ以外に山登りの立場からも問題があり、山の自然が守られるかどうかは、登山そのものをおびやかすことになりかねぬ場合もある。

新聞によれば、日高山脈を国定公園に指定し、いろいろ施設をつくってはとの運動もあるといわれる。日高山脈は、登山のうえでは日本に残されている唯一つの特異な地帯なので、公園計画の具体的内容は知らないが、過去に、いわゆる開発された北海道の山とその「開発」の結果の登山の変遷の例を振り返ってみると大きな関心と同時に危惧を抱かざるを得ない。

この山脈には、温泉もないし峡谷もせまく、一般的行楽地ではない。だが現在では林道や発電施設はかなり山奥まで入りこんでいるが、登山施設は完備といわれぬ状態だから、公園化の目的の大きな部分が「登山公園」で占められているのではないだろうか。

登山施設といえば、山路とか丸木橋とか山小屋や指導標などが考えられ、こういったもののため山がひどく害われたことは聞かない。路がつくられ大勢の人が登るようになれば、現状では高山植物が傷つけられたり、もち去られたり、山が汚されたりする程度で、またまた熊の惨事も起きるかも知れないが、自然保護の点では森林伐採、林道やダム工事のほうがはるかに大敵なのである。だが、ここでのべたいのはこういう点もあるけれど、山登りにとっては林道や伐採などはいうまでもなく、一条の細い登山路でも想像外に大きな影響がある、という点である。

登山は文字どおり山に登ることであるが登り方もいろいろだし、動機や山への考え方や気持ちもふくめてみると、ひじょうに広く多様な内面がある。だが、ここでとくにとり上げたい登山とは、未知の自然に積極的に対面し、そのなかに新しい自分の世界を追求しようとするもので、一口にいえばレジャアー登山に対するスポーツ登山のことである。

登山がはじめての人やはじめて間もない人にとっては、どんな山でも、たとえば坦々とした歩道伝いに終始する施設完備の山にしても新しい体験だし、解放感もあって無意味なものではない。しかし山登りをつづけてゆくうちに、人間向きといおうか、都市生活の延長の一部に変えられてしまった山には、遅かれ早かれ満足できなくなろう。そこには最早、フロンティアとしての生命が失われているからである。

登山は年ごとに盛んになってきている。レジャアーだ、バカンスだのといった登山も多いだろう。それはそれで良いのだが、スポーツ登山もいちじるしい進展をみせている。山登りばかりでなく、スポーツ全般を支えている精神は前むきに絶えず進み、困難をきり開く積極的な姿勢だ。外部に向かい自分の限界をいつも働きかけながら、自己の存在を確認するのである。この姿勢は人間の本性に根ざしているもので、登山ももちろんのこと、人間社会を駆動して来た原動力なのである。

原動力はよいとして、登山施設とどういう関係なのか。路を歩かず小屋にも泊らずそれで良いではないかとの疑問もあろう。

山登りは、相手を打ち負かすスポーツではない。自然そのものが対象で、たたかう相手は自分自らであるだけに、追求されるものは内面的で純粋さが必要なのである。

ペテガリ岳の山小屋に、久恋の山に登り、心中の山とかけ離れた変わり方に失望した旨の感想が残されているそうである。路や小屋を知って訪れた者ではあろうけれど、彼は山と自己との間の、あまりにも大きな夾雑物の存在が幻滅であったのだろう。この感想は、一般にはなかなか理解し難いことだろうと思われる。エゴイズムだ、といわれるかも知れない。だが登山者という者はそれほどにまで純粋な自然を求めているのである。

今日の社会ではよほどの人物でもない限り、自らが何物かを創り出す機会は持つことはできない。いまさら、私がのべるまでもないことである。このなかに埋れれば天下安泰なのだろうけれど、登山する精神の根元はちがった次元のものなのだ。山に登る人の全部がこういったことを思い悩み、意識しているわけではあるまい。しかし近年、日本での本格登山家の激増、あるいは海外への遠征が世界で一番だという事実はそれを推進した動機は多いものにせよ、背景に社会の組織や、山岳の、いわゆる開発による影響を考えぬわけにはいかない。

本筋からだいぶ離れたが、要するに山登りというものを支えている事柄を、まず知っていただきたかったからである。

§

ここで北海道の登山、そしてそのなかで日高山脈での登山にたちもどろう。北海道の山岳には、独特の持ち味があるといわれている。山は低いし、それほど峻しくはなくとも、その拡がりと原始的な自然で、じゅうぶんに補われているからであろう。以前は人の跡も稀で森は深く、地図さえ誤りが多かった。だから山に登るにはながい沢をのぼりつめ、頂からふたたび谿へという形がとられた。路伝いや指導標にたよるのではなく、未知と不安に対する自分の判断を唯一の頼りとしたばかりでなく、未知の世界が自分らの登山によって明るみに出されたのである。大正年代には地図さえなかったので、登山は探検的段階にあったといえるであろう。昭和のはじめには、すでに中央高地一帯はかなり明るみに出され、登山者はまったく未知であった日高山脈に注目した。

日高山脈は大らかな山容の中央高地の山々と異なって、険阻な山なみである。山旅の雰囲気の濃い山登りに代わって、日高ではハコ捲き、滝の登攀、さらにハイマツ漕ぎといった激しさが、当時からスポーツ登山を育ててきたのである。昭和二〇年代までは、日高山脈での登山は大略このような形で、未知でよりむつかしい登路を求めつつ発展してきたといえるだろう。このような山登りは、すでにその当時からこの山脈をおいて他に求められなかったので、はるばる訪れた人達も少なくはないのである。

しかし日高山脈にも電源開発、あるいは造材のために急速に人の手が加えられるようになった。いまでは幌尻岳直下に人工湖ができ、メナシベツの幽谷、渕行を最後まで妨んだシュンベツ本流にまで、林道が通じようとしている。こういった林道から山頂は手のとどくあたりにあって、登山路や山小屋のすでに設けられたところもある。林道や登山路の恩恵ではじめて日高の山に登られた者も数多いであろうが、その一方では、日高ならではの山登りの失われていることも否定できないのだ。

もしも今後、さらに登山路があちこちにつけられてしまう事態になったとすれば、特異的な存在であるこの山脈も平々凡々の山になり、登山的価値は低められてしまうであろう。

実際問題としては現在、日高山脈のなかには人跡未踏の地域はおろか、川一本も残されていない。厳密な意味でのフロンティアはとうに消えている。広いようでも、限られた地域なのだからこうなるのは当り前のなりゆきで、だから、日高は登山前段階での果たすべき役目が終わったとして、路をつけ、いわゆる完備された山にしてよいだろうか。

私はこうしてはならないと考えるし、北海道に限らず、日本での山登りの将来を考える岳人の多くも同意見なのだ。

日高の山登りの大半は沢登りであり、尾根ではハイマツ漕ぎだ。毎日のようにゾロゾロ人が登るのならば話は別になるが、人の踏跡は気になるほどのものでないのだ。たくさん人の登ったルートでも、その毎に登山者はルートを選ぶ。ハコはどこで捲き、沢に降りるか。ハイマツから首をつき出して、降るべき尾根のつけ根を求める。たとえ沢登りをしても、あそこまで遮ニ無ニ行けば路だという山とは、わけが違うのである。最後まで自分で案じ違り終わせるには、思考と行動のバランスが必要になる。これが大切なのである。山登りの醍醐味には、頂上の眺望や山小屋やキャンプの団欒もあろう。しかし後々までも心に残り人を豊かにするものは、くり返しになるけれど、自然から直接投げかけられた問題を自分で解決できた喜びなのだ。

現在、日高山脈にはすでにかなり登山路が設けられているが、全域を掩うまでではなく、まだ本来の山登りのできる余地は残されている。登山家の立場でいうならば、山脈の公園化に当っては、まずこの山でなければできぬ登山を守るために、慎重な考

慮が要望される。具体的にのべれば、現在既設のものは致し方がないにしても、いま以上路などは新設しないことである。

一人一人の登山者の心境や登り方は、彼が積極的に登山を追求する限り、進歩があり発展があるはずである。この進歩・発展には、北海道での登山に見られる変遷に似かよった一面がふくまれるだろう。各個人の登山の進展といっても、日本の山には限りがあるし、どうやっても限界が来てしまう者もあろう。一部の恵まれた人は、海外に出かけることもできる。しかし、大多数の者はそうは行かぬし、また限界も感ぜずにすむかも知れない。こういう多くの人達にとって、山登りの発展階程や力量の程度に応じられる山々が在ることは、ひじょうに大切なのである。現在登山は、特定の者に限られたスポーツではなくなり、大衆化されている。だがこの大衆化を、どこの山も初心者むきに改変することに考えるならば、その結末は北海道におけるスポーツ登山の崩かいを導くのだ。

北海道の夏山を現在の施設や地勢から考えてみると、小屋の不備など問題はあっても、施設完備に近い大雪火山や十勝火山がある。登山入門にうってつけの山である。山小屋はひじょうに限られているが、登山路・縦走路のよく整ったトムラウシ山や石狩岳などは、中級者にとっても楽しい山々である。日高山脈の一部、幌尻岳・ペテガリ岳・楽古岳なども整備された山にふくめられ、初級登山者も大勢登っている。

しかし、それ以外の日高の山々は昔のままの状態に保存し、上級または中級向きにするのだ。これは無計画なのではない。真の無計画とは、観光的一側面からの「開発」であり、その結果が今日わが国の山野の俗化と荒廃を招いているのではないか。

かいつまんでいえば、それぞれの山にはそれぞれの自然的特色があり、その特色を生かすようにすべきだということである。この基本的な考えは、スキー地の設計についてもあてはまる。たとえば、十勝岳三段山の針葉樹林は幅ひろく伐開されコースがつくられたが、山岳地域でのスキーの面白みは林間を縫う滑降にある。吹雪の激しい高みでは森林は良い粉雪を守り、またスキーヤーをも嵐から護っている。

スキーといえば伐開されたコースのことしか浮かばずにせっかくの好スキー地が台なしにされたのは、自然条件についての基本的な構想の欠除による代表的な例になるだろう。このようなことが起こらぬようにアメリカのスキー地開発では、何においても自然的諸条件の慎重な解析が第一番に行なわれており、営林局員や、レンジャーの必須的知識になっているのである。登山の場合には、スキー場の場合のように単に技術的問題だけに終わらない。これによって、山登りというものに深刻な問題が残されるからである。

§

さてここで日高山脈に路がつき、あちこちに小屋のできた場合、起こり得る事柄を具体的に考えてみよう。登山そのものへの影響はいままでにのべたので触れぬことにするが、すでに路や小屋のつくられた幌尻岳付近を例にするのが判りやすい。

幌尻岳の一帯には氷河地形・カールが数多く分布している。なかでも七つの沼の点在する沼のカールは、天上の楽園とまでいわれた別天地であった。路がつき登山客が増すにつれ、路沿いが汚れだした。団体登山客のあとか、揃いの弁当殻、空びんの類が乱雑に投棄されている。頂上の屑、落書などすべて以前にはなかった。沼のカール底に降るとキャンプ跡の汚れはひどく、ハイマツの生枝がやたらに伐られている。焚火をするためなのだろうが、燃えずにやめているものもある。昔日の面影は失せたといっても大袈裟でない。残飯の類は、熊をよびよせる一因であろう。

路のなかった当時には登山者は沢を伝い、ようやくカールに達した。そのくるしくても楽しい道程の間に人々は山と調和してゆき、知らず知らずの間に自然の美しさと、その味わい方を会得したのだ。今日の状態はそれとかけ離れている。カールにも路伝いである。心理的には、カールのキャンプが目的になっているようにさえ思われる。何一つ考えず体得されたものもなく、ただ息をきらせてカールにつく。どこかのキャンプ場か海浜に泊るのも同然で、日頃の慣習にしたがい物は投げ棄て、荒らし放題になる。

山小屋に対する考え方にしてもそうだ。団体でくりこみ、どこかで観楓会をやるのと大同小異の心算だから、夜の騒ぎに関しては料理屋の宴席とあまり違わない。常時監視人や管理人をおいて、施設ができたがゆえに派生した現象面を注意したり、口うるさく説教するのも防ぐための一法に違いない。登山路を設けた関係者は、ぜひこの努力をしていただきたいのである。

だが他に山の登り方、考え方を山岳の計画的な管理を通じて、登山者に体得させる方法がある。時間はかかるであろうけれどこれが本来あるべき形での登山普及の教育になるのである。こういう意味あいでも、日本にただ一つしか残されていない山々が日高山脈なのである。

（北大理学部教授）